

# ナーデル・シャーとアフガン軍団

阿 部 尚 史

は じ め に

東  
洋  
学  
報

1722年10月、アフガン系<sup>(1)</sup>のギルザイ Ghilzā'i 部族軍の侵攻により首都エスファハーンは陥落し、16世紀以来イラン高原に君臨してきたサファヴィー朝 (1501-1736) は実質的に崩壊した。以後19世紀初頭のカージャール朝 (1796-1925) の確立まで、イラン高原は戦乱の絶えない時代を迎えた<sup>(2)</sup>。18世紀中葉にはカンダハールにアフガン系ドゥッラーニー朝 (1747-1973) が成立し、ホラーサーン東部も領有した。19世紀初頭にはコーカサス、アゼルバイジャン北部がロシア帝国の支配下に入り、マルヴなどホラーサーン北部は中央アジア勢力に帰属することになった。この約1世紀の間に、エラーク、ファールス、アゼルバイジャン、ホラーサーンなど歴史的イラン世界の大部分に広がっていた旧サファヴィー朝支配領域が再編され、ほぼ現在のイランに直結する地域区分が作り出されたのである。

サファヴィー王家のタフマースプ2世 Ṭahmāsb II (在位1722-32) を助けてアフガン政権を倒し、一時的にサファヴィー朝を再興したのはホラーサーン地方出身のナドル＝コリー・アフシャール Nadr Qoli Afshār、後のナーデル・シャー Nāder Shāh (在位1736-47、以下「ナーデル」) であった。18世紀当時、イラン高原、乃ち旧サファヴィー朝中心領域の出身でナーデルに従った諸軍事集団は、トルコ系だけでなくイラン系、クルド系、ロル系をも含みつつも、史料上しばしばキジルバシ Qezelbāsh と記される。こうした現象は、当時のイラン高原で諸集団の融和が進んでいた証左とも言えよう<sup>(3)</sup>。一方、この軍隊の構成分子として、地名 (ホラーサーン、エラーク、アゼルバイジャンなど) を冠した地方軍団が史料上確認できる (例えばホラーサーン系軍団 'asāker-e Khorāsāni)。本稿では論述に際し、

第八十五卷  
六〇二

便宜上これら諸軍事集団を総称して「イラン高原系軍隊／諸軍団」と記し、各個地方軍団については史料記述に留意して、ホラーサーン系／アゼルバイジャン系軍団などと記述する。

当初、ナードルは出身地縁集団であるホラーサーン系軍団を率いて1729-30年にエスファハーンからアゼルバイジャンまでを回復し、1732年8月にはクーデタでタフマースブを廃位し、王朝の実権を掌握した。以後ナードルは、サファヴィー朝領の回復を進めると同時に、軍隊の面でもホラーサーン系に加えて、アゼルバイジャン、ファールス、エラーク系諸軍団を糾合していった。ナードルは、領土回復とイラン高原系諸軍事集団の統合にほぼ成功すると、1736年3月、即位し、新たにアフシャル朝(1736-96)を創始したのである。さらに1738-40年にかけて北インド、中央アジアに遠征し、一時的にせよイラン・インド・中央アジアにまたがる広大な地域に強大な影響力を保持するに至った。

他方、イラン高原系諸軍団の他、ナードルの許には史料上「アフガン(アフガン系/集団/部族) Afghān/Afāghene/Afghānān/jamā'at-e Afghān/ṭāyefe-ye Afghān」と記される集団が存在し、彼らもまた諸戦役で活躍していたことが知られている。本稿ではこの軍事集団を便宜上「アフガン軍団」と記す。このアフガン軍団は現在のアフガニスタンの原型とされる上述したドゥッラーニー朝の成立にも関与したとされ<sup>(4)</sup>、イラン高原の中央部でも、18世紀後半まで活躍した。それにも拘わらずアフガン軍団そのものについて今まで十分論じられたことはなかった。ナードルについての伝記的研究<sup>(5)</sup>の集大成ともいえるべきロッカートの著書 *Nadir Shah* には、アフガン軍団についても言及されているが、スンナ派・シーア派の対立という一面的な視点で論じるなど<sup>(6)</sup>、議論が古い。こうした論述の傾向は、ハンウェイ、フレイザーなど同時代の欧人旅行者、知識人などの見解<sup>(7)</sup>を引き継いだものと考えられる。

ナードルに仕えるアフガン軍団は均質なのか分類が可能なのか、不明な点が多い。そもそも「アフガン」の意味するところが史料の記述も曖昧であり、この点を整理してナードル軍・政権の中で位置

づける必要がある。アフガン軍団はナーデル死後もイラン高原の政治・社会に影響を与えており、18世紀のイラン史を考える上で無視できない存在である。

史料を読み進めると、アフガン軍団は主に2度の契機を経て成立したことが分かる。1732年3月のヘラート征服後に一度編成され、1737-9年のカンダハール・インド遠征（以下「東方遠征」）で、いまだ一度別の一団が編成され、それぞれ区別されていたのである。本稿ではこのアフガン軍団について、2度に亘る編成の過程、構成集団およびナーデルの許での活動を検討し、アフガン軍団の間の差異を明らかにし、またイラン高原中央部・西部の在地社会や諸軍事勢力との関係も考察する。以上の作業を通じて、18世紀イラン高原においてアフガン軍団の果たした役割とその意義を解明する。

本稿で用いた史料とその略号は以下の通りである。

*Aḥmad Shāhi*: Махмūd ад-Хусайнӣ, *Ta'riḥ-i Aḥmad-Shāhi*, Москва, 1974.

*Ālam-ārā*: Moḥammad Kāzem Marvī, *Ālam-ārā-ye Nāderi*, ed. Moḥammad Amin Riyāḥī, Tehrān, 1369Kh/1990-1.

*Āl-e Dā'ūd*: Solṭān Hāshem Mirzā, *Zabūr-e Āl-e Dā'ūd*, ed. 'Abd al-Ḥoseyn Navā'i, Tehrān, 1379Kh/2000-1.

*Ghaffārī*: Abū al-Ḥasan Ghaffārī Kāshānī, *Golshan-e Morād*, ed. Gholām Rezā Ṭabāṭabā'i Majd, Tehrān, 1369Kh/1990-1.

*Gitigoshā*: Moḥammad Ṣādeq Nāmī Eṣfahānī, *Tārikh-e Gitigoshā*, ed. Sa'id Nafisi, Tehrān, 1368Kh/1989-90.

*Golestāne*: Abū al-Ḥasan b. Moḥammad Amin Golestāne, *Mojmal al-Tavārikh*, ed. Modarres Reṣavī, Tehrān, 1344Kh/1965-6.

*Hanway*: J. Hanway, *An Historical Account of British Trade over the Caspian Sea*, 4 vols., London, 1753.

*Ḥoseyn Shāhi*: 'Emād al-Dīn Ḥoseynī Cheshtī, *Ḥoseyn Shāhi*, British Library, Or. 1662.

*Jahāngoshā*: Mirzā Mahdī Khān Astarābādī, *Jahāngoshā-ye Nāderi*, ed. 'Abd Allāh Anvār, Tehrān, 1341Kh/1962-3.

*Kalāntar*: Mirzā Moḥammad Kalāntar, *Rūznāme-ye Mirzā Moḥammad Kalāntar-e Fārs*, ed. ‘Abbās Eqbāl, Tehrān, 1362Kh/1983-4.

*Rostam*: Moḥammad Hāshem Āsof, *Rostam al-Tavārikh*, ed. ‘Aziz Allāh ‘Alizāde, Tehrān, 1980Kh/2001-2.

*Soltāni*: Soltān Moḥammad b. Mūsā Khān, *Tārikh-e Soltāni*, Bombay, 1881.

本稿では *Jahāngoshā* と *‘Ālam-ārā* を主要史料として利用する。*Jahāngoshā* は、ナードル期の公式年代記とも言うべきもので、アスタラーバードの名家の出身でナードルの秘書長官 monshi al-ma-mālek を務めたマフディー・ハーン（17世紀末-?）によって執筆された。他方 *‘Ālam-ārā* は、ナードル時代に中等程度の地方官吏を歴任したマルヴ出身のモハンマド＝カーゼム（1720-1年生）により作成された。モハンマド＝カーゼムは、ナードルに献呈することを意図していたわけではないため、彼の事績をより客観的に記述している。ナードル死後に関しては、*Golestāne* を主に利用した。著者アブー＝アル＝ハサン・ゴレスターネ（1789-90年没）は、ナードル治世末期から1750年代までケルマーンシャーの知事を務めた伯父の許で成長したため、ナードル没後の時代の貴重な証人と見なしうる。この他、ドゥッラーニー朝史料（*Aḥmad Shāhi*; *Hoseyn Shāhi*; *Soltāni*）、18世紀後半から19世紀初頭のイラン高原についての年代記、英人の報告記 *Hanway* などで補完する。

## 第1章 アフガン系アブダーリー軍団

### 1 アブダーリー軍団の成立

ナードルは1716年以来ヘラートを占領していたアフガン系アブダーリー Abdālī 部族を2度の遠征（1729、1731-2年）で屈服させ、第2次遠征後に以下の命令を下し、実行させた。

- a. アブダーリー部族をヘラートから、マシュハド、アビーヴァルドからセムナンまでのホラーサーン各地に分散させて移住させた（*Jahāngoshā*, 166）。

- b. アブダーリー部族のアブド＝アル＝ガニー・アリコザイ ‘Abd al-Ghani ‘Alikozā’i に「ハーン」の呼称 *kheṭāb-e khānī* を与え、同部族の統治 *ḥokūmat* を委ねた (*Jahāngoshā*, 180)。
- c. ナーデルのエラク方面への転進に際し、アブド＝アル＝ガニーをアブダーリー部族の指導者達とともに馬、武具その他必要なものを揃えて参陣させた (*Jahāngoshā*, 180–181)。

以上からアブダーリー部族がホラーサーン各地に強制移住させられ、政治勢力としての一体性を弱められたこと、一部が軍事集団としてナーデルの許に編入されたことが判明する。1732年時点のナーデル麾下のアフガン軍団とは乃ちアブダーリー軍団のことを指していたのである。アブド＝アル＝ガニーは、部族自体は分散させられたため、部族の支配者としての影響力は一見すると理念的で限定的であったものの、アブダーリー軍団司令官という役割によって、自身の地位を次第に確立していったのである。

軍団の規模について *Jahāngoshā* や *‘Ālam-ārā* には具体的な記述はないが、アルメニア語史料に、このとき7千人のアブダーリー軍団がナーデル軍に加わったと記され<sup>(8)</sup>、またドゥッラーニー朝史料にもアブダーリー軍団の数は6、7千人であったと言及されている (*Aḥmad Shāhi*, 14a)。つまりアブダーリー軍団は当初から又は、徐々に数を増やし、最終的に6、7千人規模になったと考えられる。ヘラート征服当時、ナーデルは軍事面でホラーサーン系軍団のみに支えられていたため<sup>(9)</sup>、アブダーリー軍団の編入は大きな意味を持っていた。

## 2 アブド＝アル＝ガニー・アリコザイと

### アブダーリー軍団の活動

ドゥッラーニー朝創始者アフマド・シャー *Aḥmad Shāh* (在位 1747–73) の一代記 *Aḥmad Shāhi* に、アブド＝アル＝ガニーとアブダーリー軍団について、以下のように記されている。

アブド＝アル＝ガニー・アリコザイは前述の高貴なる部族(＝アブダーリー部族)の中ではさほどの地位を有していたわけでは

なく、陛下（＝アフマド・シャー）の尊敬すべき父君（＝ザマーン・ハーン *Zamān Khān*）の代には儀典長を務めることで榮譽に浴していたが、[ナードルは]彼を取り立て、昇進させて、高貴なるドゥッラーニー部族（＝アブダーリー部族）の統治 *ḥokūmat* とナードラーバード *Nāderābād* と命名されていたカンダハールの総督職 *beglarbegi* を授けた。[ナードルは]常に6、7千人の高貴なる部族の有能な若者たちを自身の陣営に近侍させ、位階と地位の点でキジルバシや自身のアフシャール部族 *Afshār-e khod* より高めて、彼らを尊重していた。前述の高貴なる部族は、誠実さと心からの願望で、ルーム、ヒンドウスターン、トルキスタンの国々での戦いすべてで、『ナードル史』（＝*Jahāngoshā*）に書かれているように、勇ましく尽力し、多くの土地を占領し、神の恩寵により無数の敵をうち破り、彼らの戦列を粉碎し、ナードルの陣営の榮譽の源となっていた。

(*Aḥmad Shāhi*, 14a-b)

この記述から、以下の4点を確認できる。

- a. アブド＝アル＝ガニーはナードルの抜擢でアブダーリー部族の統治を委ねられた。
- b. アブダーリー軍団は6－7千人から構成され、ナードルに近侍していた。
- c. アブダーリー軍団はナードルに非常に重用され、忠誠を誓っていた。
- d. アブダーリー軍団は諸戦役で活躍した。

アブド＝アル＝ガニーはアブダーリー部族の支族、アリコザイ族の出身で、第1・2次ヘラート遠征に際してアブダーリー部族側の和睦の使者を務め、1732年3月のヘラート征服後、部族の統治を委ねられ、アブダーリー軍団を率いて参陣することを命じられた。彼は使者として、度々ナードルと接する中で個人的な関係を築き、ヘラート開城に貢献したことで部族の支配者に抜擢されたのである（*Jahāngoshā*, 180－181）。

アブド＝アル＝ガニーは、早速1732年末からの対オスマン戦にア

ブダーリー軍団とともに参加し、軍功をあげた。特にバグダードを巡る戦いで奮戦し、アブダーリー軍団はナーデルから恩賞を受けられた一方で、戦いで怠慢だったクルド系などの指揮官たちは罰せられた (*Jahāngoshā*, 199–200; *‘Ālam-ārā*, 261–265)。かくしてナーデルはアブダーリー軍団の能力を高く評価するようになったという (*‘Ālam-ārā*, 268)。こうした事情が先に引用した「位階と地位の点でキジルバシや自身のアフシャール部族より高めて」という記述に関係しているのであろう。ナーデルは対オスマン戦役での活躍、勇猛さをみて、アブダーリー軍団を信頼し、重用するようになったと推察される。

これ以後もアブダーリー軍団は東方遠征などナーデルの諸戦役に従軍し、1738年のカンダハール征服後、アブド＝アル＝ガニーは同地の総督に任命された。彼はインド遠征後、1740年からの中央アジア遠征への従軍の代わりに、親征を予定していたシルヴァーン・ダゲスタン遠征<sup>(10)</sup>への先行を命じられた。この軍事作戦で、彼はアブダーリー軍団を率いて一定の成果を上げ、その後同地に親征したナーデルの本隊に合流した。遠征の途中から彼について史料上の記述が見られなくなることから、ダゲスタン遠征中もしくはその直後に、死去または引退したようである<sup>(11)</sup>。アブド＝アル＝ガニーの後、ヌール＝モハンマド・ハーン・アリーザイ Nūr Moḥammad Khān ‘Alizā’i<sup>(12)</sup> が、カンダハール総督・アブダーリー軍団司令官となった<sup>(13)</sup>。彼も軍団を率いて、1747年の暗殺事件までナーデルの軍事活動に従軍した。アブダーリー軍団は2人の司令官の許、順次、一元的に統率されていたのである。

カンダハール遠征後、アブド＝アル＝ガニーが同地の総督に任命されたことは既述したが、この他にも占領後のナーデルによる諸政策はアブダーリー軍団の動向に大きな影響を与えた。それゆえ、*Jahāngoshā*, 302–303に記されているこれらの政策を検討しておきたい。

- a. カンダハールを破壊し、包囲戦中建設したナーデラーバードに住民を移した。

b. ナードラーバードの統治権 *eyālat* をアブド＝アル＝ガニーに委ね、アブダーリー部族の有力者たちを周辺地域の知事 *ḥokkām* に任じた。

c. ナードラーバードとその周辺をホラーサーン各地に移住させられていたアブダーリー部族の居住地とし、カンダハール地方に住むギルザイ部族をホラーサーン各地に移住させた。

以上から、第2次ヘラート遠征の結果、実質的に解体されていたアブダーリー部族は、ナードルの意向により、カンダハール地方に集住することで改めて一体化され、さらにアブド＝アル＝ガニーに同地の統治が委ねられたことが明らかとなる。従来、カンダハールは「ホラーサーンとヒンドウスターンの境界」(*‘Ālam-ārā*, 552)として軍事・統治の上から重視され、ナードルが同地を東方支配の拠点としたことは、ナードラーバードという名前にも現れている。このような要地をアブダーリー部族に一任した背景として、彼らがナードルの活動の初期以来、軍事的貢献をしたこと、彼らの勇猛さや忠誠を信頼したことを挙げられるが、それに加えてアブダーリー軍団がナードルに近侍していたことに注目したい。

アブダーリー軍団の近侍についての記述は *Aḥmad Shāhi*, 14a, 18a 以外の史料にも見られる<sup>(14)</sup>。一方、カンダハールを委任された後、アブダーリー軍団は同地にも駐屯しており(*‘Ālam-ārā*, 1184–1185)、ナードルに近侍し、彼の指揮の許に軍事活動に従事する6、7千人の軍団と二分されていたのである。ナードルは、アブド＝アル＝ガニーとその後任のヌール＝モハンマドにカンダハール総督とアブダーリー軍団司令官を兼務させ、絶え間ない諸軍事活動に際し、6、7千人とともに近侍させていた。アブダーリー部族は、ナードルに征服されたという立場にある上に、上記の2人はともに、出身支族の勢力を背景としたのでなく、ナードルの抜擢により、総督・軍司令官となったため<sup>(15)</sup>、彼の意向に忠実で、また部族の統治にナードルの後援を必要としていたと考えられる。加えて、2度の強制移住を通じて、アブダーリー部族に対するナードルの影響力は強化されていた。こうした状況を鑑みると、ナードルは恒常的にカン



ダハール統治に関与できたはずである。つまりナーデルは、自らに近侍させていたアブダーリー部族に要衝カンダハールを委任することによって、自身の意向を反映させつつ、同地を安定的に統治することを狙ったのであった。

このように、ナーデルに近侍する一方で、カンダハール統治を任されたアブダーリー軍団は、史料上一貫して好意的に記述されている。とりわけアブド＝アル＝ガニーに対する評価は高い。‘*Ālam-ārā*, *Jahāngoshā* とともに、上述のごとく対オスマン戦での活躍を讃えており、‘*Ālam-ārā* の著者モハンマド＝カーゼムはアブド＝アル＝ガニーのバグダード攻防戦での活躍を詩に詠んだ（‘*Ālam-ārā*, 263）。最後の2句を取り上げてみたい。

ガニー・ハーン・アフガンはこの戦いで

ルームの兵、シャームの兵を百千と殺した。

シャーは彼を賞賛されて

アフガンたちにたくさん贈り物を下さった。

また同様の場面で、*Jahāngoshā* では「アフガン（＝アブダーリー）軍団は特筆すべき奉仕の源であり、実際この名高き勝利の立て役者であった」（*Jahāngoshā*, 200）と記されている。

対オスマン戦の他、前述のダゲスタン遠征でも、アブド＝アル＝ガニー率いるアブダーリー軍団が活躍したことが強調されている。さらに ‘*Ālam-ārā* では同遠征でアブド＝アル＝ガニーが敵の捕虜への対応を批判して、改善させた出来事が記されている（‘*Ālam-ārā*, 861–862）。このように ‘*Ālam-ārā* では、彼は勇猛・有能な武人としてだけでなく、敬虔で義侠心ある人物として描写されており、アフガン系であることを理由として、彼やアブダーリー軍団を否定的、差別的に記述することはなかったのである。

以上、ナーデル麾下のアブダーリー軍団について検討した。元来、アブダーリー部族はナーデルの軍事力に屈服した被征服集団であった。その上で対オスマン戦での活躍を機に評価され、重用されるようになったこと、ナーデルに近侍していたこと、それらの影響でカンダハール統治を委任されたことなどを見ると、アブダーリー軍

団は、ナードル個人の強い意向を反映して、政権の中での役割を定められていたことが判明する。彼らはよく統率され、対外的な軍事活動が中心であったため、イラン高原の在地社会とも衝突せず、また軍事的に活躍したため、史料上も好意的に記述されることとなったと考えられる。

## 第2章 東方アフガン系諸軍団

本章では東方遠征を機に編成されたと考えられるもう一つのアフガン軍団について考察する。編成の契機、ナードル軍全体の中での比重を示し、さらに史料記述から、年代記著者及び市民の彼らに対する認識を検討し、在地社会との関係・軌轢を明らかにする。

### 1 東方遠征における軍団編成

#### (1) 編成の過程とその結果

前章でも述べたように、1736年即位したナードルは、依然としてギルザイ部族の支配下にあったカンダハールに親征し、1738年3月、同地を占領した。このときギルザイ部族をホラーサーン各地に移住させ、彼らの一部を軍隊に編入した (*Jahāngoshā*, 303)。続けてナードル軍は北インドへ侵入し、ムガル軍を破り、1739年3月デリーに入城した。ナードルはムガル朝とシャリーマール条約 *peymān-e Shalimār* を締結し、カーブル、ペシャーワルなどアトック川以西の領有を認めさせた<sup>(16)</sup>。本稿ではムガル朝に割譲させた地域を「東方州」と記す<sup>(17)</sup>。デリーからの帰路、同年12月カーブルでナードルはアフガン系を中心とする軍事集団の徴集を命じた。

ナードルの高貴な王朝に属していたアトック西岸地方の全領域で、ペシャーワル、カーブルのアフガン系集団 *Afghān* 4万人とハザーラ系集団、その他、山地に住む諸部族 *ilāt-e kūhne-shīn* を奉仕の列に加えて、ヘラートへ送るべし (*Jahāngoshā*, 338)。

これは1732年に続く主要なアフガン軍団編入であり、その規模も4万人と前回に比して多いことに注目する必要がある。徴集の対象地

域は東方州であり、ナーデルは軍事勢力を取り込むことで同地の支配権を明確にしたのである。このとき徴集されたアフガンは、カーブル、ペシャーワル地方に多数居住していたアフガン系ユースフザイ Yūsufzā'i 部族から構成されていたと考えられる。一方アフガン系の他ハザーラ系なども徴集したとする言及に注意せねばならない。アフガン系を中心にしつつも、この地域の集団を幅広く結集したのである。ナーデルは東方遠征後、1740年には中央アジア遠征を行い、アム川以南を支配領域に加え、マーワラーアンナフル、ホラズムを宗主権下に置いた。その際、2万人規模のウズベク系、トルコマン系の兵士を編入した (*Jahāngoshā*, 351, 359)。

諸遠征後のナーデル軍の構成に関する記述が史料に見られる。1743年8月頃始まった対オスマン戦に際し、ナーデルが閲兵した軍隊の構成が *‘Ālam-ārā* に記され、総勢は37万5千人とされている (*‘Ālam-ārā*, 887-888)。前述した東方遠征で編成されたと考えられる軍事集団については以下の通りである。

ガズナ、カーブル、ジャラーラーバード、ペシャーワル、ラホール、シャージャハーナーバード、ムルターン、カシミール、アグラ、バクフル (=ラクナウ)、デカン、その他ヒンドゥスターン、スィンドの各地の集団 *ṭāyefe* からなる7万人が整えられ、[ナーデルに] お目通りをした *az naẓar-e kīmiyā-athar goza-shtand* (*‘Ālam-ārā*, 888)。

前述の通り、ナーデルがムガル朝から獲得した領土はアトック川以西である。*‘Ālam-ārā* の著者モハンマド=カーゼムはインド関係の事情に疎かったことが指摘されており<sup>(18)</sup>、上記の記述にデリー、デカン方面まで含まれているのは誇張か誤りの可能性が高い。当該箇所では取り上げられている軍団は東方遠征で編成された軍団を指していると考えてよく、ユースフザイ部族がこの軍団の多数を占めていたはずである。上記の軍団の全体における割合を計算すると、7万人は全軍37万5千人の2割近くを占め、また中央アジア遠征で編入されたマーワラーアンナフル、ホラズム系の軍団(6万人)と併せると3割を超す。1739-41年を境に、新軍団の大量導入により、

ナードル軍は主にイラン高原系からなる軍隊から、アフガンなど東方の軍事集団、中央アジア系の軍事集団も含む混成軍に変化したのである。

## (2) 史料に見られる東方遠征で編成された

### 軍事集団に対する認識

前に述べた閲兵式の記述（‘*Ālam-ārā*, 888）をもう一度考えてみたい。「ガズナ、カーブル、ジャラーラーバード、ペシャーワル……各地の集団からなる7万人が整えられ……」とある。東方遠征で編成された軍団はアフガン系などから構成されたはずだが、いずれも出身地域名が記されるだけで、部族名・集団名などが判然としないことに注意したい。‘*Ālam-ārā* の同じ箇所、ホラーサーン系軍団を中心としたイラン高原の諸軍団については詳しい構成部族、集団名を知りうる。また同じアフガン系でも、カンダハールに集住していたアブダリー部族、ホラーサーン各地に強制移住させられていたギルザイ部族は明記され、ホラーサーン地方の軍隊の中を含められている（‘*Ālam-ārā*, 887）。‘*Ālam-ārā* の閲兵式の記述が、部族関係など人的な結合を無視し、地域ごとに区分して閲兵式の様子を記録したためである。ともあれ、イラン高原系諸軍団と、東方遠征で編成された軍団との記述の差（具体性の有無の差）は ‘*Ālam-ārā* の著者モハンマド＝カーゼムの認識の限界を示している。マルヴ出身の彼にとってカンダハール以東は異国のヒンドウスターンで、情報も限られていたため、東方遠征で編成された軍団を構成する具体的な人間集団名を記述できなかったのであろう。この軍事集団は量的には2割に迫るものの、年代記の著者でさえ彼らに対して漠然とした認識しか持っていなかったのである。このような東方遠征で編成された軍事集団が年代記では如何に記述され、また彼らがどのような役割を担ったのか次節で検討しよう。

## 2 東方アフガン系諸軍団の構成と活動

### (1) 東方アフガン系諸軍団の特徴

1743年の対オスマン戦以降、アブダーリー軍団とは別に、ナーデル麾下に「アフガン軍団 Afghān」が存在していたことが史料中に見出せる（しばしば「Afghān va Ūzbek」と併記される）。東方遠征で編成された軍事集団がこのアフガン軍団を構成していたに他ならない。前節で、東方遠征ではアフガンだけでなくハザーラ等も編入されたことは指摘したが、以後、史料にハザーラ軍団等について記述はない。また、ユースフザイ部族がアフガン系の多数を占めつつも、ギルザイ部族も含まれていた。このように東方遠征で編成された軍団は、ユースフザイ部族だけでなく様々な集団を内包していたにも拘わらず、その多様な構成は考慮されず、史料上ただ Afghān や jamā'at-e Afghān と記されたのである。

東方遠征で編成された軍事集団は、イラン高原中央・西部の人々にとっては異質で未知な集団であったに違いない。そのため、前節で記したように対オスマン戦の閲兵式では、彼らは地域集団として記述された。こうした曖昧な認識が、東方遠征で編成された「未知な」諸軍団を主要構成員である「アフガン」という名称のもとに、一括させたのである。本稿では東方遠征で編入され、「アフガン」と史料上記された諸軍事集団を、便宜上「東方アフガン系諸軍団」と記し、アブダーリー軍団と区別したい。既述のように、この軍団は必ずしも一体性を持っていたわけではなく、多様な集団から構成されており、注意が必要である。

アブダーリー軍団もアフガン系に属するため、史料中、混同されることもあるが、一方で彼らが区別されうる特別な存在であったことも確認できる。対オスマン戦の閲兵で、アブダーリー軍団はホラーサーン地方の軍団の範疇に含められていた（'Ālam-ārā, 887）。また1743年末から翌年までイランに滞在したハンウェイは、当時のナーデル軍の構成を記録し、この中でアフガン軍団とアブダーリー軍団にも言及している（Hanway, vol. 1, 252）。

50000人のアフガン軍団 Afghans: 彼らはカンダハールに土地

を与えられ、その他に年80クラウン [与えられている]。彼らは弓矢、槍、剣を使い、非常に勇猛である。この名称にはアブダーリー軍団 Abdollees も含まれる。

アブダーリーはアフガンに含まれつつも、彼らが独自性を持ち、特別に知られていたことをハンウェイは示唆している。加えて、具体的な活動の中でも、アブダーリー軍団と区別されて述べられている箇所をペルシア語年代記中に発見することもできる。

(1746年頃、シースターンでの叛乱に際して) 勅令にもとづき、モハンマド＝レザー・ハーン・ケルクルー・アフシャル Moḥammad Reẓā Khān Qerqlū Afshār はシャーセヴァン、マルヴ系、アフガン、アブダーリーの諸軍団を引き連れてファラーフへ向かい、同地に数日留まるように…… (‘Ālam-ārā, 1184)。ここでも、アブダーリー軍団と東方アフガン系諸軍団が同一ではなく、差異があるものと認識されていたことが窺える。ドゥッラーニー朝史料の *Aḥmad Shāhi* でも、アブダーリー部族を *il-e jalil-e Dur-rāni* と呼ぶのに対し、その他のナーデル麾下のアフガン系をただ *Afghān* と記し (*Aḥmad Shāhi*, 100a, b)、意図的に区別している。対オスマン戦以後に散見する「アフガン」については、その曖昧な言葉の内容を意識して区別しなければならない。

## (2) イラン高原各地への展開

東方アフガン系諸軍団は1743年からの対オスマン戦役に参加した他、(‘Ālam-ārā, 923)、様々な軍事活動に携わった。具体的な従軍例として、ファールス総督タキー・ハーン Taqī Khān Shirāzi の乱の鎮圧 (‘Ālam-ārā, 946, 953–955)、シースターンでの叛乱鎮圧 (‘Ālam-ārā, 1184) が挙げられる。この2つの叛乱鎮圧では、ホラーサーン系アミールの指揮下、ホラーサーン軍団とともに活躍していた。またイラン高原各地に守備隊として派遣され、駐屯した例としては、アゼルバイジャン派遣 (*Jahāngoshā*, 428)、タキー・ハーンの乱後のファールス守備 (*Kalāntar*, 26)、マシュハド守備 (*Āl-e Dā’ūd*, 90) カズヴィーン駐屯 (*Golestāne*, 134–135)、エスファハー

ン駐屯 (*Aḥmad Shāhi*, 74a)、シャフレズール駐屯 (*Aḥmad Shāhi*, 100a-b) などがある。また1744年、ハンウェイは800名のアフガン兵がナーデルへの合流途上、カズヴィーンに滞在していたことを目撃した (*Hanway*, vol.1, 228)。このように東方アフガン系諸軍団は主に旧サファヴィー朝領域各地に派遣され、反乱鎮圧、治安維持など地方統治に一定の役割を果たすようになったのである。支配の中核であるマシュハド、エスファハーン駐屯やオスマン国境地帯のシャフレズール守備のような重責を担ったことは、ナーデルからの信頼を示している。東方アフガン系諸軍団は、国外の敵と戦う集団である以上に、境界地域の防衛や国内の治安維持を担うという性格が強く、主にナーデルに近侍していたアブダーリー軍団との役割の違いも明確になる。

東方アフガン系諸軍団の多方面での活動は、ナーデル軍の中核であったホラーサーン系軍団が、東方遠征後、以下のようにホラーサーンの安全保障に関わる軍事活動に忙殺されたことが背景にあったと考えられる。

- a. 東方州治安維持のため派兵・駐屯 (1740年-) (*Jahāngoshā*, 352-353; *Ālam-ārā*, 1006-1032)
- b. 宗主権下にあったホラズムでの2度の内乱を鎮圧 (1742, 1743年) (*Jahāngoshā*, 368, 377-379, 411-412; *Ālam-ārā*, 864-866, 966-977)
- c. バルフ近郊での叛徒討伐 (1742-3年) (*Jahāngoshā*, 379-380; *Ālam-ārā*, 996-999)
- d. アスタラーバードにおけるカージャール部族の内紛から生じた叛乱の鎮圧 (1744年) (*Jahāngoshā*, 400; *Ālam-ārā*, 960-965)
- e. マーワラーアンナフルの動乱に出兵 (1746年頃) (*Jahāngoshā*, 414; *Ālam-ārā*, 1102-1136)

以上のように、ほぼ毎年、ホラーサーン系軍団が中心となり、ホラーサーン周辺地域へ大規模な遠征が行われていた。東方アフガン系諸軍団は、ホラーサーン系軍団の出動によるイラン高原の軍事的空白を埋めるべく、積極的に動員されたのである。

東方アフガン系諸軍団がイラン高原の各地に駐屯し、活発に活動したことで、「アフガンのために世相が変化した」(*Āl-e Dā'ūd*, 90)と史料に記述されるまでになり、彼らの活動は、イラン高原に大きな影響を与えたと見なされた。在地社会の住民が東方アフガン系諸軍団に対する根深い不信感を持っていたことがこうした記述の背景にあり、また他の史料記述にも見られる。つまり、年代記作者らが反アフガン意識を代弁していたのである。一例として上述したタキー・ハーンの乱鎮圧における東方アフガン軍団についての描写を取り上げてみたい。

勝利の軍隊はシーラーズ市民を三昼夜にわたって捕らえ、略奪をした。アフガン軍団 *jamā'at-e Afghān* はムスリムの殺害に躊躇することはなかった。一方、キジルバシの集団は財貨を略奪し、子供たちを捕らえていた。運命のかぎ爪で殺害された人の多数はアフガンたちの手 *dast-e Afāghene* によっていた (*'Ālam-ārā*, 954)。

一部の男性、女性らはシャー・チェラグの聖なる庭園に避難していたところ、アフガン・ウズベク軍団 *jamā'at-e Afghān va Ūzbek* はその偉大なるイマームザーデへの畏敬の念を顧慮せず、[避難していた] その人々の首に縄をかけ、外へと引きずり出した。そのうち男たちを殺害し、女たちを捕縛した (*'Ālam-ārā*, 955)。

タキー・ハーンの乱はナードル治世最大の内乱であり、厳しく弾圧された。上の引用から、イラン高原系の軍事集団（キジルバシ）と対比させて、東方アフガン系諸軍団が、市民に対して殺人も平気で犯す、より野蛮で危険な集団と描写され、在地社会から忌避されていたことが窺える。特に重要な参詣地として崇敬を集めるシャー・チェラグ廟での蛮行は彼らの印象を悪化させたことは間違いない。アフガン系がスンナ派であるためシーア派聖廟で蛮行をしえた、という非難が上の引用に暗示されているように思えてならない。アブド＝アル＝ガニーやアブダーリー軍団を好意的に記述した *'Ālam-ārā* も、以上のように東方アフガン系諸軍団については批判的に記



述した<sup>(19)</sup>。イラン高原に広く駐屯し、異質であり且つ実態がよく分からぬ、暴力的な集団に対して、在地勢力や住民が全般的に反発を強めるようになったのは必至であろう。アブダーリー軍団と違って、各地に派遣された東方アフガン系諸軍団は、ナーデル政権の支配の先兵としてイラン高原の在地社会と密接に関係したため、政権を代表する抑圧者としての印象を一層強くすることとなったのである。

以上、東方遠征後に成立した「東方アフガン系諸軍団」の構成と活動、史料から見られる在地社会との関係について検討した。東方アフガン系諸軍団とアブダーリー軍団との違いは、構成集団や役割の面だけでなく、政権との関わり方、在地社会からのイメージにも及んでいた。近侍を中核としたアブダーリー軍団の役割にはナーデルの個人的な意向が強く反映していた一方、東方アフガン系諸軍団は、政権を運営する上での必要性に基づきイラン高原各地での駐屯・守備、治安維持などに携わったのであり、そのことが結果として在地社会との軋轢を生み、ナーデル政権の圧政の象徴として非難されたのである。

### 第3章 ナーデル死後のアフガン軍団

ナーデル・シャーはホラーサーンのハブーシャーンで起こった叛乱鎮圧に向かう途上、その近郊で、1747年6月19日夜から20日の早朝の間に、暗殺された。本章ではナーデル死後のアブダーリー軍団と東方アフガン系諸軍団の活動をおい、最終的な顛末を確認し、イラン高原でのアフガン軍団の重要性を明らかにしたい。

#### 1 アブダーリー軍団とドゥッラーニー朝

ナーデル暗殺時、アブダーリー軍団も、彼の軍事活動に同行し、ハブーシャーン近郊に野営していた。*Aḥmad Shāhi*によれば最後尾に陣取っていたという(*Aḥmad Shāhi*, 18a)。暗殺が発覚すると、アブダーリー軍団はナーデルへの忠誠から、その遺体を確保すべく、アフシャル軍団などと交戦した。この場面について *Jahāngoshā*

の記述を見てみよう。

ナードルの王朝の信奉者 havā khāh-e dowlāt-e Nāderi であるアフガン・ウズベク軍団はアフマド・ハーン・アブダーリーとともに彼（＝ナードル）の一門への忠誠を守り、アフシャール軍団や陣の兵士達と争い始めた（*Jahāngoshā*, 426）。

上記引用から、「アフガン・ウズベク軍団」が、アブダーリー軍団を指したとは確定できないが、アフガン・ウズベク軍団は全体としてナードルに忠誠を誓っていたと認識されていたことは分かる。アブダーリー軍団や東方アフガン系諸軍団など、諸遠征活動の過程で新たに編入された軍事集団は、イラン高原の在地勢力でない以上、君主であるナードルとの関係にのみその存在理由と重要性があると見なされていたはずである。従って彼ら非イラン高原系の軍事集団と、イラン高原に基盤を持つアフシャール軍団などの在地勢力は微妙な緊張関係にあったため、ナードル死後、両者間で一挙に対立が噴出したのである。

アブダーリー軍団は形勢の不利を悟り、最終的に陣から離脱し、根拠地カンダハールへ急いだ。彼らはホラーサーンでの政変に関して情報を握っていたため、カンダハール守備隊、部族有力者などの機先を制し、首尾よく同地を確保することに成功したのである。その直後、7月の始めに、御前のヤサウル yasāvol-e ḥoẓūr としてナードルに仕えていたアブダーリー軍団の有力アミール、アフマド・ハーン<sup>(20)</sup>がシャーとして即位し、ドゥッラーニー朝が誕生した<sup>(21)</sup>。6月のナードル暗殺から1ヶ月後のことである。

ドゥッラーニー朝が素早く成立した背景として、カンダハールを確保していたこと、またアブダーリー軍団がナードルに近侍していたことで、彼の暗殺という政変に際し、情報を素早く入手し、迅速に対応できたことが挙げられるだろう。ナードルの対アブダーリー部族政策が、他のどのアフガン諸部族でもなく、アブダーリー部族による王朝創始の大きな要因になっていたことに疑いの余地はない。新王朝の成立は歴史的イラン世界における政治的分立の重大な契機になったのである。

アブダーリー軍団はナーデル死直後にカンダハールに帰還したため、その後のイラン高原の政治状況に与えた影響は間接的なものといえる。次節では、ナーデル死後、イラン高原の覇権闘争で重要な役割を果たした東方アフガン系諸軍団の動向を探ってみたい。

## 2 ナーデル死後の東方アフガン系諸軍団に対する反発

### (1) アフガン軍団に対する在地住民の反発

ナーデル死後、イラン高原に残った東方アフガン系諸軍団に対するイラン高原の在地社会と在地の諸勢力との確執・対立は様々な場面で顕在化した。アフガン系勢力は1722年にはサファヴィー朝を崩壊に導き、一時的にイラン高原の主要部分を占拠した。そのため多くの人々が「アフガン」に対して複雑な感情を抱いていたと考えられる<sup>(22)</sup>。また前章で述べたように、タキー・ハーンの乱鎮圧に際し、崇敬を集めるシャー・チェラーグ廟で暴力行為を行ったことは、東方アフガン系諸軍団に対する憎悪を拡大させていたと考えられる。こうした感情に対するアフガン側の危機感として、以下のような記述が見られる。

エラークや他のイラン諸地域の人々は、ナーデルの圧政と彼のアフガン・ウズベク軍団への寵のため、皆、[アフガン・ウズベクに]報復しようとしている (*Golestāne*, 135)。

アフガン・ウズベク軍団はナーデル政権の圧政の象徴と見なされ、怨嗟的となっていた。

ナーデル死後の混乱の中、ハマダーン近郊で数名のアフガン兵が住民に殺害される事件も発生し、その報復として、東方アフガン系諸軍団の一隊がハマダーンに侵攻し、略奪・殺害行為を行った (*Golestāne*, 135-136)。統率を欠く東方アフガン系諸軍団は各地で襲撃・略奪事件を起こしたと伝えられており (*Jahāngoshā*, 432; *Golestāne*, 136-137)、当時、在地社会とアフガン軍団の間で緊張関係が日に日に高まっていたことが予想される。「スンナ派アフガン軍団がシーア派住民を圧迫することを目論んでいた」と、サファヴィー朝の旧臣が宗派問題と関連させて批判する記述も見られる

(*Rostam*, 247)。当時、東方アフガン系諸軍団は様々な口実で非難されていたのである<sup>(23)</sup>。

## (2) イラン高原の在地諸勢力との対立

アフガン軍団とイラン高原系軍団の対立はよく知られているが、ナードル存命中には抑制されており、対立が表面化しなかったと思われる。

前述のように1747年6月ナードルは暗殺された。*Golestāne* はナードル治世末期について、*Jahāngoshā* から一部簡略化して引用しているが<sup>(24)</sup>、暗殺事件の記述に関しては独自の見解を述べている。

*Jahāngoshā* には、ナードルの甥アリー＝コリー・ハーン ‘Ali Qoli Khān の煽動により、アミールたちが暗殺を実行した経緯が簡潔に記され (*Jahāngoshā*, 425–426)、ザンド朝の年代記 *Ghaffāri* もこの記述に従う (*Ghaffāri*, 35)。一方 *Golestāne* では、ナードルがアフガン・ウズベク系アミールを重用し、イラン高原系のアミールの粛清を謀っていた計画が漏れ、暗殺事件が発生した事情が詳述されている (*Golestāne*, 11–15)。どちらの記述が正しいか即断できないが、ハンウェイも若干の留保をつけつつも *Golestāne* とほぼ同じ見解を残していることから (*Hanway*, vol. 4, 260–264)、後者の説も広く流布していたようである。ナードルの治世末期にはアフガン・ウズベク系の勢力伸張にホラーサーン系などイラン高原系勢力が危機感を募らせていたのである。

暗殺事件直後からアブダーリー軍団とイラン高原系軍団は陣営で干戈を交えるなど、その対立は鮮明となった。マシュハドでも東方アフガン系諸軍団追放事件が発生し、「キジルバシに好意を寄せる」アリー＝コリーに市が引き渡されるなど (*Āl-e Dā’ūd*, 90)、反アフガンの機運が高まった。こうしたなかアリー＝コリーの弟、エブラーヒーム・ハーン Ebrāhim Khān を巡ってアフガン系の軍団とイラン高原系の軍団の対立は頂点に達した。

ナードル死後、アリー＝コリーは実権を掌握して、アリー・シャー ‘Ali Shāh (在位1747–8) として即位した。その後兄アリー・シャー

を倒し、覇権を獲得していたエブラーヒームは、ホラーサーンにおけるシャーロフ Shāhrokh（ナーデルの孫）の即位を受けて<sup>(25)</sup>、自らもエブラーヒーム・シャー Ebrāhim Shāh と称し、ホラーサーン遠征に乗り出した。彼の許には多数のイラン高原系軍団、東方アフガン系諸軍団、ウズベク軍団が集結していた<sup>(26)</sup>。行軍途上セムナーンで、ホラーサーン系有力アミールが反旗を翻しシャーロフ側に奔ったことを契機とし、エブラーヒーム麾下のイラン高原系軍団は次々と戦列から離脱した。背景として以下のように、彼らのアフガン・ウズベク軍団への敵意が挙げられている。

アフガン・ウズベク軍団はナーデル・シャー時代に定められていたように、エブラーヒーム・シャーの信頼と厚遇を頼みにして、侵略の手を大胆という袖から出し、キジルバシの弱いものや貧しいものたちに対して秘密裏に弾圧・圧迫を行っていた。キジルバシ軍のハーン、司令官たちはこのことに怒り、2 集団に対するエブラーヒーム・シャーの厚遇を不快に思っていた (Golestāne, 31)。

東方アフガン系諸軍団やウズベク軍団が君主の信頼・寵を抛り所にして影響力を強め、自分たちを圧迫することに、イラン高原系軍団は危機感を募らせていたのである。

エブラーヒームは体制の立て直しを期して、戦列にとどまっていた東方アフガン系諸軍団らとともにコムに向かった。彼は遠征出発の前にコムに財宝、物資等を残し、アフガン・ウズベク兵を守備に配置していたのである。エブラーヒームの到着に先立って、反アフガン・ウズベクの機運がコムでも高まり、イラン高原系軍団を中心に、彼らを排除しようとする動きが現れた (Golestāne, 33)。エブラーヒームの入城も拒否されたことから、コム包囲戦に至った。夜襲で損害を受けたことを機に、ギルザイ部族の有力アミール、アーザード・ハーン Āzād Khān<sup>(27)</sup> が東方アフガン系諸軍団の一部、1 万 5 千人とともに戦線を離脱すると、残された軍団も四散し、エブラーヒーム軍は崩壊した (Golestāne, 35-36)。

エブラーヒーム・シャーの没落は、東方アフガン系諸軍団などの

新興勢力とイラン高原系の対立に端を発し、反アフガン・ウズベク感情により加速され、最終的に東方アフガン系諸軍団の不統一性により終局したのである。アフガン系とイラン高原系の激しい対立が、ナードル没後のイラン高原において政治状況を左右する最も重要な要因になっていた。ナードル政権はイラン高原の支配を東方アフガン系諸軍団などの軍事力を用いて維持する体制をとったが、こうした仕組みはエブラーヒームの没落を機に完全に崩壊したのである。このときマシュハドに君臨していたシャーロフの影響力はホラーサーンに限定され、既にナードル暗殺直後から各地に見られた諸勢力の自立の動きは、一挙に加速化したのである<sup>(28)</sup>。

一方、エブラーヒーム没落後、緊張をはらみつつも両者が協力した事例も見いだせる。上述したアーザード・ハーンはオルミエのアフシャル部族と同盟を結び、一度は覇権闘争で最も有力な位置を占めた。彼とともに覇権闘争を演じたモハンマド＝ハサン・ハーン・カージャール Moḥammad Ḥasan Khān Qājār やイラン高原の中心部を統一し、ザンド朝を興したキャリーム・ハーン Karīm Khān Zand も麾下に旧東方アフガン系諸軍団の一部を従えていた。これらの事例は高い戦闘能力を持つアフガン兵が、一種の傭兵集団として利用されていたことを示している<sup>(29)</sup>。

こうした事情を考慮に入れるとエブラーヒーム没落後、東方アフガン系諸軍団の立場に変化があったことが判明する。旧サファヴィー朝領域内の秩序維持を担い、ナードルの支配体制を支えた軍事集団が、覇権闘争に利用される傭兵集団になったのである。このような東方アフガン系諸軍団の影響力の低下は、ナードルの築いた支配体制の崩壊に伴って引き起こされたと言ったことができるだろう。

### 3 アフガン軍団の最期

1760年のノウルーズ明け前、キャリーム・ハーンは各地にいた配下の旧東方アフガン系諸軍団の粛清を命じた。彼は前年、モハンマド＝ハサン・ハーン率いるカージャール勢力を破って、ホラーサーンを除くイラン高原中央・西部の覇権をほぼ手中に収めていた<sup>(30)</sup>。

肅清命令を発した背景として以下のような記述が見られる。

この血を求める集団（＝アフガン軍団）は至高なるサファヴィー王家の滅亡の原因であり、王権の基を混乱させることと数多くの暴虐が彼らから現れており、この不信心者の悪しき行いは極みに達していたが、彼らは真実の復讐者の問責を省みもしないので、全能の神の逆鱗にふれた（*Golestāne*, 322）<sup>(31)</sup>。

ここでは、2つの論点を読みとれる。1つはアフガン軍団を、サファヴィー朝を崩壊させた張本人として非難していることである。2つ目に、「王権の基を混乱させることと数多くの暴虐が彼らから現れており」という記述から、アフガン軍団は傭兵集団として利用されていたが、統率することが困難であり、彼らが在地住民に残虐行為などを引き起こし続けたことが示されている。キャリーム・ハーン麾下のアフガン軍団の大半はアーザード・ハーンの前配下の旧東方アフガン系諸軍団であったようで<sup>(32)</sup>、一部モハンマド＝ハサンを経てキャリーム・ハーンに臣従した者もいた（*Rostam*, 282）。アフガン軍団が状況・利害に応じて度々主君を変えていく経緯が窺える。イラン高原の強敵をほぼ倒したキャリーム・ハーンは、騒乱の因となり、不人気なアフガン軍団の肅清を謀ったと結論づけることができよう。

ノウルーズ明け、マーザンダラーン、テヘランなど支配領域各地でアフガン軍団が一斉に肅清された。このときだけでも、殺害されたアフガン兵の数は9千人に上るという<sup>(33)</sup>（*Golestāne*, 323）。この事件をもって、サファヴィー朝崩壊以来、イラン高原において政治・軍事状況に大きな影響力を保持していたアフガン軍団はほぼ消滅したのである<sup>(34)</sup>。

## む す び

本稿ではナーデル・シャー麾下の2種のアフガン軍団について検討した。アフガン軍団は主に2度の契機、乃ち1732年の第2次ヘラート遠征の成功と1737－9年の東方遠征を経て編成された。前者のアブダーリー軍団と後者の東方アフガン系諸軍団は構成、役割、史料

上のイメージの違いも含めて、同じ「アフガン軍団」であってもこの2集団を同一に論じられず、区別して考える必要性が明らかになった。アブダリー軍団は6-7千人規模で主にナードルに近侍し、その身边で軍事活動に従事する傍ら、カンダハール統治を任された。近侍とカンダハール統治委任には密接な関係があり、ナードルの同地への影響力を保持する意図が背景にあった。ナードルの政策は、アフガン系の中でも特にアブダリー部族が王朝を創始する重大な要因となったのである。他方、史料上はただ Afghān とのみ記される東方アフガン系諸軍団はアフガン系以外も含む多様な集団の集まりで、均質で一枚岩の軍団と見なすことはできない。この東方アフガン系諸軍団は数万人規模で、主に旧サファヴィー朝領内各地の秩序維持のために派遣され、ナードル政権を支える軍勢力として重要な役割を果たした。彼らのうち多数はナードル暗殺後もイラン高原に留まり、引き続き軍事集団として活動し、イラン高原の在地社会及び同地の軍事集団と対立を深めた。これがナードル死後、彼の支配体制が瓦解する原因ともなった。彼らはエブラーヒーム・シャー没落後、覇権闘争で傭兵として利用され、最終的にキャリーム・ハーンの権力確立に際しその役割を終え、在地社会の反アフガン機運とも相まって粛清されたのである。

本稿で述べたように複合的な諸要因の結果、様々な理由、口実で危険視・敵視されることになった東方アフガン系諸軍団がイラン高原の政治的統一を契機に一掃されたことは、旧サファヴィー朝領域の枠組み崩壊後、新しいイラン形成という大きな流れの中で、アフガンは「異質なものの」と認識され、また排除されるべきものとなったことを意味している。こうしたアフガンを異質視・敵視する認識は、カンダハールに建国されたばかりのドゥッラーニー朝にも適用され、イラン高原の在地社会にかの地の政権との分離を促す機運を醸成したと考えられる<sup>(35)</sup>。こうした事態は歴史的イラン世界の解体を一層助長したのである。サファヴィー朝の枠組み崩壊後、領域的に再編されたイランが新たに形成されていく問題は、文化・社会的な問題も考慮して多面的に論じる必要があり、今後の課題とした



い。

## 註

東  
洋  
学  
報

第  
八  
十  
五  
卷  
  
五  
七  
八

- (1) アフガン系はバシュトゥーンとも称し、サファヴィー朝領内（カンダハール、ヘラート地方）に居住していたアブダリー部族、ギルザイ部族とムガル領内（カーブル、ペシャーワール地方）に居住していたユースフザイ部族の3部族が特に有力である。本稿で比較的詳しく取り扱うアブダリー部族は、ポバルザイ Popalzā'i、アリーザイ 'Alizā'i、アリコザイ 'Alikozā'i、バーラクザイ Bārakzā'i などの支族に分かれ、1747年の王朝創始に際し、ドゥッラーニー部族と改名した。
- (2) ラムトンはイランの18世紀を「部族の再興と官僚制の衰退」と否定的に評価し（A.K.S. Lambton, "The Tribal Resurgence and the Decline of the Bureaucracy in the Eighteenth Century," in T. Naff & R. Owen, eds., *Studies in Eighteenth-Century Islamic History*, Carbondale, 1977, pp. 108-129）、以後の研究に影響を与えていたが、近年近藤の研究はこうした見解に修正を促している（近藤信彰「キジルバシュのその後」『東洋文化研究所紀要』129（1996年），pp.121-176；N. Kondo, "Qizilbash Afterwards: The Afshars in Urmiya from the Seventeenth to Nineteenth Century," *Iranian Studies*, 32（1999），pp. 537-556）。
- (3) アッバース1世期（1587-1629）以降、サファヴィー朝支配下で、諸社会集団の融和が進行した事象については、前田弘毅「サファヴィー朝期イランにおける国家体制の革新」『史学雑誌』107-12（1998年），pp. 1-38 参照。
- (4) ナーデル死後、アフガン軍団を率いてカンダハールに帰還したアフマド・ハーン Aḥmad Khān Abdālī が同地で即位したと指摘されている。一例として最近のアフガニスタン史概説書 M. Ewans, *Afghanistan*, Surrey, 2001, pp. 22-23 参照。
- (5) 欧人は18世紀以来、ナーデルについて伝記的研究を数多く残している。代表的な作品として、J. Fraser, *History of Nadir Shah*, London, 1742; Hanway; Ch. Picault, *Histoire des revolutions de Perse*, 2

- vols., Paris, 1810; L. Lockhart, *Nadir Shah*, London, 1938 など。
- (6) 例えば「スナ派のアフガン・ウズベク軍団」の存在が、タフマースブを廃して即位する後ろ盾であったと記述している点などに見られる (Lockhart, *op. cit.*, p. 96)。
- (7) 例えば廃位されたタフマースブの監視に当たっていたのが、ほとんどアフガン系などスナ派であったという記述や (Fraser, *op. cit.*, pp. 107-108)、ナードルがスナ派として育てられたと記されていることなど (Hanway, vol. 4, 126)。
- (8) Abraham of Erevan, *History of Wars 1721-1738*, trans. G. Bournoutian, Costa Mesa, 1999, p. 64.
- (9) ナードルは1729-30年の対アフガン系ギルザイ部族勢力戦、対オスマン戦役の後に、ホラーサーン系軍団を除く軍隊をタフマースブ2世に返還していた (*Jahāngoshā*, 136)。
- (10) ナードルは、インド遠征の途上、弟のエブラーヒーム Ebrāhīm がダゲスタンの反乱分子討伐戦で戦死したことを知らされ、同地への遠征を決意していた (*Jahāngoshā*, 346)。
- (11) 19世紀後半に執筆された史料である *Soltāni* では、アブド＝アル＝ガニーはインド遠征後、視力を失って死亡したと記されている (*Soltāni*, 121)。
- (12) ヌール＝モハンマドの初期の活動について十分な情報がないが、1735年末頃ヘラート近隣で発生した反乱の鎮圧に参加したことが確認できる (*‘Ālam-ārā*, 439-440)。
- (13) 後代の史料である *Soltāni* に、アブド＝アル＝ガニー死後、ヌール＝モハンマドがアブダーリー軍団司令官職に任命された記述がある (*Soltāni*, 121)。また *Aḥmad Shāhi* でも、ヌール＝モハンマドがカンダハール総督・軍団司令官職にあったという (*Aḥmad Shāhi*, 21b)。
- (14) 例えばドウッラーニー朝史料では *Hoseyn Shāhi*, 8a など。また *‘Ālam-ārā*, 765 に、「アフガン軍団1万2千人を集めて常に至聖なる鏡の御許でご奉仕させるように」とある。この場面はインド遠征の帰路、カンダハールでのことであるため、上記のアフガン軍団はアブダーリー軍団を指すと考えるのが妥当である。

- (15) アブダーリー部族内で、最も強力な支族はバーラクザイ族であり、アリコザイ族、アリーザイ族ともにさほどの力を持っていなかった。19世紀初頭のアブダーリー部族の構成が、18世紀における支族間の力関係について一つの目安になる (M. Elphinstone, *An Account of the Kingdom of Caubul*, London, 1815 [New Dehli, 1998], pp. 397-399 参照)。
- (16) 条約の概要については、R. Islam, *A Calendar of Documents on Indo-Persian Relations*, vol. 2, Lahore, 1979, pp. 79-83 参照。
- (17) 1740年にナーデルは腹心のタフマースブ=コリー・ハーン・ジャラーイエル Ṭahmāsb Qolī Khān Jalāyer にこの地域の統治を一括して委任したことから (*Jahāngoshā*, 352-353; *Ālam-ārā*, 787)、本稿ではこの地域をナーデル政権下の一つの行政単位とみなす。
- (18) Н. Д. Миклухо-Маклай, “Введение”, *Наме - йн ‘Ā lamārā - йн Нāдирā*, 1, Москва, 1960, p. 16.
- (19) *Kalāntar* でも、シーラーズで東方アフガン系諸軍団が市民を苦しめたことが記録されている (*Kalāntar*, 25-26)。
- (20) アフマドの父ザマーン・ハーンは1710年代末から20年代始めにかけて、アブダーリー部族を統治し、アブド=アル=ガニーと姻戚関係があった。
- (21) アフマドの即位に関しては様々な疑問があり、史料を蒐集した上で再検討が必要である。彼は有力なアミールであったが、ナーデル暗殺時、近侍していたアブダーリー軍団を指揮していたわけではなかった。また通説ではアフガン系諸部族の総会であるロヤ・ジルガ Loya Jirgah で君主に選ばれたとされているが、*Aḥmad Shāhi* や *Hoseyn Shāhi* などアフマド期またはそれに近い年代記には、こうした経緯についてほとんど言及されていない。アフマドについての伝記的研究である Ganda Singh, *Aḥmad Shah Durrani*, New Delhi, 1958; M. Ghobār, *Aḥmad Shāh Bābā-ye Afghān*, Kābul, 1322Kh/1943-4 は、即位の部分については、*Soltāni* の記述の影響を受けており (*Soltāni*, 123-124)、注意が必要である。
- (22) 例えば、「キジルバシの一派はアフガン・ウズベク軍団に対して、以

前から敵対心を持っており、現在も大変な苦痛を感じている。というのもこの集団の行動が、真理を知る至高なるサファヴィー家に対して忘恩であることに關しては、「太陽よりも明らか」であるためであり…」（*Golestāne*, 34）という表現が見られる。

- (23) 興味深い事例としてアフガン系とイラン系の婚姻関係が挙げられる（*Rostam*, 287）。緊張關係にあった両者も個人レベルでは結婚・出産もあり、多様な交流が垣間見られる。
- (24) *Golestāne*, 8-10 は *Jahāngoshā*, 420-423 に該当する。*Golestāne* ではナードルに対する美称などが省略されている他、難解で冗長な文章が省略又は簡素化されている。
- (25) 当時のシャーロフを取り巻く状況とホラーサーンの事情については、小牧昌平「18世紀中期のホラーサーン」『東洋史研究』56-2（1997年），pp. 176-200 参照。
- (26) 総勢3万5千人の軍隊を擁していたという（*Golestāne*, 31）。アゼルバイジャン、エラク系軍団の他、同地に展開していたホラーサーン軍団や東方アフガン系諸軍団、ウズベク軍団の中心部分がエブラーヒームに従っていたと考えられる。
- (27) 彼の活動について、J. Perry, *Karim Khan Zand*, Chicago & London, 1979, pp. 48-68; 小牧昌平「ザンド朝の成立過程について」『上智アジア学』5（1987年），pp. 35-37 参照。
- (28) こうした諸勢力に關しては、小牧、同上、p. 30 の一覧表参照。
- (29) 小牧、同上、p. 37。
- (30) キャリーム・ハーンの権力確立に關しては、小牧、同上ほか Perry, *op. cit.* 参照。
- (31) 類似した記述が *Gitigoshā* にも見られ（*Gitigoshā*, 89）、当時の年代記作者たちに共通の認識であったと考えられる。
- (32) キャリーム・ハーンに仕える元アーザード・ハーン配下の有力アフガン・アミールが多数確認できる（*Ghaffāri*, 116）。
- (33) *Ghaffāri* によれば、テヘランにいたアフガン兵7、8千人が肅清され、セムナーンで1800人が殺害され、その他の地域でもアフガン軍団が一掃されたという（*Ghaffāri*, 116-117）。

- (34) オルミエのアフシャル部族勢力に従っていたアフガン兵も、キャ  
リム・ハーンによる同地の遠征後、肅清された (*Golestāne*, 327)。  
(35) アフマド・シャーやドゥッラーニー朝のアフガン軍団を危険視・敵  
視するなど、批判的な記述が史料中に散見される。例として *Golestāne*,  
76; *Ghaffāri*, 635; *Rostam*, 224–225 など。